

2016 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻

修士論文題目

スマートフォンなどのメディアが
親子に与える影響について
－親子のメディアを用いたやり取り場面の行動観察から－

指導教員（ 谷向 みつえ ）

社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻

学生番号 21561003 氏名 大寺あゆみ

目次

I はじめに	3
II 研究 1	3-15
1. 目的	3-5
2. 方法	5-6
3. 結果	7-14
4. 考察	14-15
III 研究 2	16-32
1. 目的	16
2. 方法	16-21
3. 結果	21-30
4. 考察	31-32
IV 総合考察	32-33
V 引用文献	34-35

I はじめに

近年スマートフォンなどのメディアが急速に家庭に普及してきており、それに伴いメディアの影響についての研究が数多くなされている。本研究では、親子で一緒に使用しやすいタブレットと、子ども一人でも使用できて場所を問わず気軽に使用できるスマートフォンに着目して、メディアが母子相互作用に与える影響について調査を行う。メディアについての研究は、その影響について危惧するような研究が多く見られる。その一方、子育て中の母親を対象としたホームページを作成し、ネット上でコミュニティを作ることで孤立しがちな母親への援助につなげていくような、メディアやネットを活用する方法を検討する研究も増えてきている（山田, 2005）。また、母親のメディア・インターネット環境の変化に伴い、子どもをめぐるメディア・インターネット環境の変化についても研究がなされてきている（松村, 2015）。

本研究では、研究 1 と研究 2 を通して、母親のスマートフォン使用の現状について調査することと、行動観察から親子のかかわりにメディアが与える影響について検討することを目的とする。

II 研究 1

1. 目的

近年メディアが急速に家庭に普及してきている。各メディアの所有率についてベネッセ教育総合研究所（2013）では、テレビ 99.6%、ビデオ・DVD 97.4%、パソコン 94.7%、タブレット端末 29.3%、スマートフォン（母親）60.5%、スマートフォン（父親）63.6%という結果が出ている。スマートフォンについて詳しく見てみると、スマートフォンを使用している母親のうち 40 歳以上が 47.2%、30 歳代が 63.5%、20 歳代以下が 80.2%と世代が若くなるにつれて使用率が上がっている。このことから、将来母親がスマートフォンを所有する割合は増加すると考えられる。また、母親がスマートフォンを使用している家庭での子どもの使用頻度についても同研究によって行われているが、週に 3 日以上使用している割合は 1 歳児で 21.9%、2 歳児で 33.0%、3 歳児で 32.4%、4 歳児で 23.0%、5 歳児で 23.6%、6 歳児で 22.9%となっており、最もスマートフォンに触れている 2 歳児に関しては、1 日に 15 分以下使用している子どもが 63.2%と最も多く、次いで 30 分くらい使用している子どもが 11.5%という結果となっている。

総務省の平成 26 年版情報通信白書をスマートフォンに注目して世界規模で見ると、2013 年における世界出荷台数は前年比 38.4%増の 10 億 420 万台で、年間出荷台数がはじめて 10 億台を超え、このような出荷台数の増加に伴い、スマートフォンユーザー数は 2014 年に 17.5 億人、全携帯電話利用者の 38.5%を占め、今後も増加を続け、2017 年には 25 億人に達し、全携帯ユーザーの 48.8%に達するとしている。スマートフォン購入によるインターネット全般の利用頻度の変化についてみてみると、日本を含めどの国でも「増えた」と

という回答が 5 割を超えており、「減った」という回答が 1 割に満たないことが顕著に表れており、スマートフォンに移行したユーザーではインターネットが一層利用されるようになったことがみてとれる。このように、スマートフォンやネットの普及に伴い、ネット依存などの新たな課題が注目されている。ネット依存について日本、アメリカ、イギリス、フランス、韓国、中国の 6 カ国で国際的なウェブアンケートが行われた。その結果、6 か国共通で 10～20 代のネット依存傾向が高い層が多くなり、年齢層が上がるにつれてその依存傾向の割合が小さくなっていった。我が国ではその 10～20 代の 1 割強がネット依存傾向が高い結果となったものの、フランスに次いでこの値は低く、我が国が特筆してネット依存傾向が高いわけではないことがうかがえる結果となった。

我が国の携帯電話契約数全体に占めるスマートフォンの比率は 2014 年 3 月末時点では 47.0% であるが同年中に半数を超え、2019 年 3 月末には 7 割強まで普及するとみられている。また、自宅でのパソコンの使用時間について、スマートフォン保有者は 115 分であるのに対し、未保有者 166 分と前者のほうが 50 分程短くなっており、スマートフォンがパソコンの代わりになりつつあることがうかがえる（総務省, 2014）。

スマートフォンやタブレットなどのメディア機器の特徴の一つとして、パソコンを開くよりも手軽にインターネットを利用できることがあげられる。上記のようにスマートフォンが普及しインターネット利用者が増加していることに伴い、養育者のインターネット利用について調査された研究がいくつかある。草野・高野・藤田（2015）は、小児救急外来を受信した保護者の家庭でのインターネット利用実態と、時間外診療をした子どもの保護者がどのような医療情報で受信判断をしているかについて研究を行っている。この研究では、最もインターネットを利用する端末として 44.8% の人がスマートフォンをあげている。さらに年齢別にインターネット利用端末についてみると 21～30 歳でスマートフォンが 68.5% と最も多いのに対して、31～40 歳では PC を利用する人が 39.6%、41 歳以上では PC を利用する人が 52.3% であり、年齢によりインターネットを利用する端末に違いがみられている。保護者が子どもの健診や病院の情報を得る手段として、最もあげられているのは市報（52.8%）であるが、次いであげられているのがインターネットであった（46.9%）。

中山・山崎・石原・久保田・寺田・秋月・平川（2008）によって、子育て支援事業において、子育て中の人々が望む情報公開の方法を把握することなどを目的に行われた研究がある。この研究では、母親たちが希望する情報収集手段として最もあげられたのは、広報機関紙を自宅まで配送する（58.1%）であり、次いで新聞・テレビ・ラジオ（12.0%）やインターネット（10.2%）などが僅差であげられる結果となっている。

また、母親の情報収集手段や相手について、久木元（2013）によって、母親のインターネット利用とオンラインコミュニティの役割についての研究の中で調査されている。この研究では、育児に関する不満や不安を聞いてほしい時に

話す相手として「ママ友」が 66.5%と最も多く、次いで「妻の母」が 62.6%という結果が示されている。また、「ママ友」や「妻の母」などのサポートの与え手との交流時のコミュニケーションツールについても調査が行われている。最も多いのが「会って話す (79.1%)」であるが、それに続く回答として、「妻の母」の場合は「電話 (68.4%)」であるのに対し、ママ友の場合は「携帯メール (61.7%)」が続く結果となっている。「ママ友以外の友人」では最も多いのが「携帯メール (67.0%)」であり「対面接触 (53.9%)」を上回る結果が示されている。母親の SNS 使用についての調査では (武市, 2014)、SNS 利用者のほうがママ友の人数が非利用者より多いことが示されていて、SNS 利用者がママ友と SNS で交流しているかについてたずねた結果、65.4%の人はしていないという結果であった。SNS でのママ友間の交流において、「育児生活」や「母親としての自分」に関する内容が重要視されていることが明らかになっている。

上記のように、メディア環境の変化に伴い、養育者のメディア使用について様々な研究がなされている。しかし、養育者を取りまくメディア環境はめまぐるしく変化しており、その現状や影響もそれに伴い常に変化し続けていると考える。そこで研究 1 では、保育園と子育て支援センターを利用する母親を対象に、質問紙を用いて、母親が考えるメディアを使用することについてのメリット・デメリットや、使用の現状について調査することを目的とする。

2. 方法

調査対象

調査対象者は、保育園児の母親 28 名と、地域子育て支援センターを利用している母親 95 名と、研究 2 に参加された母親 22 名である (合計有効回答数 145 名、回収率 64.7%)。回答いただいた母親の平均年齢は 32.4 歳 ($SD=5.2$)、子どもの平均年齢は 3 歳 4 ヶ月 ($SD=1.7$) であった。

調査方法

保育園と子育て支援センターで質問紙を配布し、それぞれ配布の 1 週間後に回収箱を設け回収を行った。

調査内容

1) スマートフォンの依存度についての調査

戸田・西尾・竹下 (2015) のスマホ依存尺度 (Wakayama Smartphone Dependence Scale : WSDS) を用いて母親のスマートフォン依存の程度を調査した。WSDS は 21 項目で構成されており、「ネットコミュニケーションへの没頭」と「スマホの優先」と「マナーの軽視」と「ながらスマホ」と「長時間の通話」の 5 因子からなっている。戸田他はさらに下位概念の類似性を勘案し、「スマホの優先」と「長時間の通話」を合わせた「スマホの優先と長時間使用」、「マナーの軽視」と「ながらスマホ」を合わせた『「ながらスマホ」とマナーの

軽視」の3つの下位尺度に構成した。WSDSは質問紙を用いて4件法でたずねた。

2) 母親のスマートフォン使用についての意識 (大寺, 2016)

WSDSと同時に、母親が子育ての中でスマートフォンを使用することに対してどのように感じているのか、母親の子育てにおけるスマホ使用の実態などについて調査するために質問項目を作成し、4件法でたずねた。項目数は13項目で、項目内容をTable 1に示す。

Table 1 母親のスマートフォン使用についての意識調査の質問項目

子どもがスマホを使いこなしている姿を見るとうれしくなる
子育てにスマホを使うことに罪悪感を感じる
子どもとの遊びの中でスマホをおもちゃと同じ感覚で使うことがある
スマホで得られる子育て情報に満足している
スマホは幼いころから使用しておくべきだ
スマホは子どもに悪影響があると思う
スマホを使うことに罪悪感を感じる
スマホを持っていない親は大変だと思うことがある
ネットで得られる子育てについての情報に満足している
子どもと遊ぶ時にスマホを使って遊ぶと子どもが喜ぶ
スマホ依存ではないかと考えたことがある
もっと子育てにスマホを活用すべきだ
スマホを子育てにどう活用してよいのかわからない

3) メディア機器使用の状況

WSDSと意識調査に加えて、普段子どもとの関わりの中でよく使用する機器、スマートフォンを使用する時間帯、子どもについての情報収集手段としてよく用いるものについて選択肢の中から選んで記入してもらうようお願いした。また、記述式で、スマートフォン使用歴、スマートフォンを使用するメリット、デメリット、おすすめのアプリ、スマートフォン使用時のWebの閲覧内容について記入してもらった。

倫理的配慮について

本研究は、関西福祉科学大学の研究倫理委員会の審査を受けている(15-42)。調査の目的を書面にて説明し、調査に同意しない場合は白紙で提出してもらうよう調査用紙に記載して調査を行った。また、結果は統計的に処理され個人が特定されないこと、いつでも調査協力を辞退できる旨も書面にて説明した。

3. 結果

1) Wakayama Smartphone Dependence Scale (WSDS) の結果

WSDS の下位尺度得点と総得点を Table 2 に示した。

Table 2 Wakayama Smartphone Dependence Scale (WSDS) の総得点と下位尺度得点

	<i>M</i>	<i>SD</i>
ネットコミュニケーションへの没頭	4.46	3.09
スマホ優先と長時間使用	4.79	3.54
『ながらスマホ』とマナーの軽視	7.32	3.84
総得点	17.05	8.52

2) 母親のスマートフォン使用についての意識調査の結果

意識調査の結果を Table 3 にまとめた。平均値が最も高得点であった項目は「スマホは子どもに悪影響があると思う」であった ($M=1.9$ 、 $SD=0.8$)。最も低得点であった項目は「もっと子育てにスマホを活用すべきだ」であった ($M=0.6$ 、 $SD=0.7$)。

また、意識調査の項目について、「まったく該当しない」と「あまり該当しない」を「該当しない」に、「やや該当する」と「該当する」を「該当する」に分け、該当しない群と該当する群では WSDS の結果に差があるかどうか t 検定を行った (Table 4)。その結果、Table 4 に示した 7 項目で、「該当する」と回答した母親は「該当しない」と回答した母親より WSDS の得点が有意に高かった。

Table 3 母親のスマートフォン使用についての意識調査の平均値 (*SD*)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
スマホは子どもに悪影響があると思う	1.92	0.84
スマホで得られる子育て情報に満足している	1.68	0.75
子育てにスマホを使うことに罪悪感を感じる	1.60	0.83
ネットで得られる子育てについての情報に満足している	1.56	0.77
子どもと遊ぶ時にスマホを使って遊ぶと子どもが喜ぶ	1.39	0.93
子どもとの遊びの中でスマホをおもちゃと同じ感覚で使用する ことがある	1.20	0.94
スマホを持っていない親は大変だと思うことがある	0.99	0.96
スマホを子育てにどう活用してよいかわからない	0.96	0.86
スマホ依存ではないかと考えたことがある	0.89	0.95
スマホを使うことに罪悪感を感じる	0.77	0.73
子どもがスマホを使いこなしている姿を見るとうれしくなる	0.70	0.69
スマホは幼いころから使用しておくべきだ	0.65	0.65
もっと子育てにスマホを活用すべきだ	0.63	0.67

Table 4 スマートフォン使用状況による Wakayama Smartphone Dependence Scale (WSDS) の平均値 (*SD*) の差の検定結果

		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値
子育てにスマホを使うことに罪悪感を感じる	該当しない	14.91	7.95	-2.47*
	該当する	18.42	8.66	
子どもとの遊びの中でスマホをおもちゃと同じ感覚で使うことがある	該当しない	15.38	7.90	-2.45*
	該当する	18.87	8.90	
スマホで得られる子育て情報に満足している	該当しない	13.80	7.76	-3.62*
	該当する	18.89	8.43	
スマホを使うことに罪悪感を感じる	該当しない	16.16	8.39	-3.59*
	該当する	22.74	7.27	
スマホをもっていない親は大変だと思うことがある	該当しない	15.34	7.86	-3.61*
	該当する	20.95	8.77	
ネットで得られる子育てについての情報に満足している	該当しない	15.15	8.45	-2.35*
	該当する	18.50	8.34	
スマホ依存ではないかと考えたことがある	該当しない	13.91	7.08	-7.92*
	該当する	24.21	7.12	

* $p < .05$

WSDS と母親の年代（20代～40代）、子どもの年齢（2歳以下、3～4歳、5～6歳、7歳以上）母親のスマートフォン使用歴について χ^2 検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

3) メディア機器使用の現状

スマートフォンの使用歴は平均2年2カ月 ($SD=1.9$) で、最も使用歴が短い人で1ヶ月、最も使用歴が長い人で10年であった。母親が子どもとの関わりの中でよく使用する機器について、選択肢からよく使うものをあげてもらった。延べ数をまとめると、最も多かったのがテレビ (88.1%) で、次いでスマートフォン (79.7%)、DVD・ブルーレイ (62.6%) であった。

母親がスマートフォンを使用する時間については、21時から25時を選択した母親が最も多く (50.0%)、次いで18時から21時が多かった (28.6%)。次に、子どもについての情報収集手段としてよく用いるものについて、最もよく使うものから順番に数字を記入して選んでもらった結果の述べ数をまとめた (Table 5)。その結果、59.3%の人がママ友の口コミを選択しており、次いでスマートフォンを選択した人が47.5%、パソコンを選択した人が28.3%という結果であった (複数回答)。

Table 5 子どもについての情報収集手段として

よく用いるもの 結果

(有効回答数 374 件)

情報収集手段	割合
ママ友のロコミ	59.3%
スマートフォン	47.5%
パソコン	28.3%
親	27.0%
テレビ	22.7%
保育園や幼稚園の職員	16.5%
市町村のホームページ	10.3%
雑誌	8.4%
配偶者	8.3%
保健センターの職員	7.0%
病院の医師	6.3%
その他	4.9%
新聞	4.2%
SNS	4.2%
ラジオ	2.1%
病院などのパンフレット	1.4%

次に、記述式で回答を求めた、母親が子どもとかかわるときに使用するおすすめのアプリについての結果を Table 6 に、スマートフォン使用時の Web の閲覧目的についての結果を Table 7 にまとめた。子どもとかかわるときに使用するお勧めのアプリとして最もあげられたのは、無料動画配信アプリであった。Web の閲覧目的として最もあげられたのは、情報収集であった。

Table 6 おすすめのアプリの結果（有効回答数 80 件）

回答例		
無料動画配信アプリ	39 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ YouTube ・ dTV ・ GYAO!KIDS
ゲームアプリ・ 知育ゲームアプリ	28 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ やったね！できたね！アンパンマン ・ たっちしてベビー ・ 教育アプリ
なし	8 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ してません ・ 特になし ・ わかりません
音楽アプリ	2 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ おやすみオルゴール ・ 音楽アプリ
その他	3 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鬼の電話

Table 7 Web の閲覧目的（有効回答数 129 件）

回答例		
情報収集	56 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報収集 ・ 子育てについての調べ物 ・ 調べ物
ネットショッピング	49 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ フリマアプリ ・ ネットショッピング ・ オークション
ニュースを見る	16 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ ニュースを見る・ ・ ヤフーニュース
趣味	4 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 趣味
その他	4 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 病院の予約

4) 母親が思うスマートフォンを使用するメリット

記述式で記入を求めた、母親が考えるスマートフォンを使用するメリットの回答を 6 つに分類し、Figure 1 に示した。また、分類ごとの回答例を Table 8 に示した。回答した母親の 53.3% が、スマートフォンを使用するメリットとして「手軽さ」をあげていた。

Table 8 母親が思うスマートフォンを使用するメリット（回答例）

手軽さ	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに知りたいことを調べられる ・PCをあけずに子どもの遊び場を調べられる ・すぐに情報収集できるので、病気など何かあったときに助かる ・同じ子育て中のママの情報がすぐ手に入り助かる
子どもが静かにしてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが静かになる ・ないてないてどうしようもないとき ・ぐずった時に YouTube を見ているとき ・どうしても用事があるときに少し見て静かにしてくれるので助かります ・子供がぐずったときの最終兵器
外出時に役立つ	<ul style="list-style-type: none"> ・電車などで泣き出したときに泣き止ませるのに便利 ・公共の場で騒いだときに利用する ・外出時にも使用できる ・ぐずった時や、外出先などでじっとしてほしいときなど助かる ・買い物に連れて行くときに静かにしてくれる ・おもちゃが手元になくてもアプリなどで遊ばせてあげれる
家事が楽	<ul style="list-style-type: none"> ・家事などで手一杯のときに遊んでいてもらおうと助かることがあります ・自分が用事をしたいときにスマホで遊んでいるとおとなしい ・洗い物のときなど一人でいてほしい時に使えるので食事の準備をするときに時間確保できる
特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし ・ガラケーが壊れなければ、私はスマホに変えなくてもよかったと思ってる
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・歌やダンスを覚える（一緒に） ・子供にキッズ携帯を持たせているので位置情報 ・自然に操作を覚え、色ぬりや言葉を覚えている

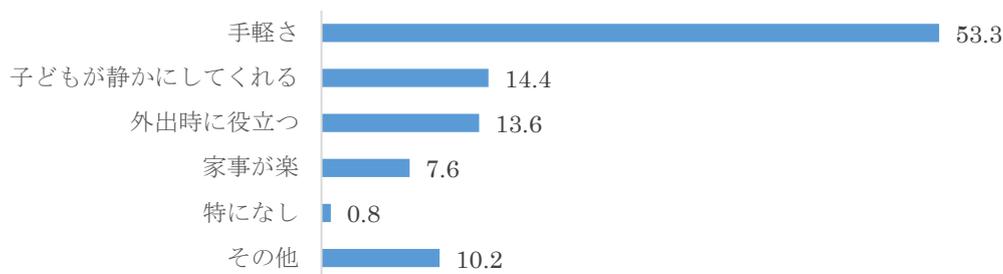


Figure 1 母親が思うスマートフォンを使用するメリット

5) 母親が思うスマートフォンを使用するデメリット・心配事

記述式で記入を求めた、母親が思うスマートフォンを使用するデメリット・心配事を7つに分類し、Figure 2に示した。また、分類ごとの回答例をTable 9に示した。記入した母親の32.3%が、スマートフォンを使用するデメリット・心配事として「依存」をあげていた。次いで、29.3%で「視力への影響」があげられていた。

Table 9 母親が思うスマートフォンを使用するデメリット・心配事（回答例）

依存	<ul style="list-style-type: none"> ・スマホを取り上げるとなくのでスマホ依存にならないか 心配 ・依存すること ・小さい画面に釘付けになって、ずっと使用し続けないか ・依存しないか、（将来）が心配 ・気軽に使用できる分依存が出てくるのかな？と思う
視力への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・目に影響するのか？悪くなる？ ・目の疲れ ・視力低下 ・目が悪くなる
情報過多	<ul style="list-style-type: none"> ・情報に一喜一憂してしまう ・いろいろな情報がありすぎてどれが正解かわからない ・情報量が多すぎて惑わされることがある ・情報量が多い
特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし ・今のところ特にない
コミュニケーションの減少	<ul style="list-style-type: none"> ・子供が使用することで親子の会話が減る気がする ・すべて SNS で会話できるので、人間同士の直接のコミュニケーションが苦手な人が多くなる ・内気な子になるかも ・携帯ばかりに興味がいきそうでコミュニケーション能力の欠如などの問題につながらないのか
誤操作	<ul style="list-style-type: none"> ・事件に巻き込まれないか心配 ・子どもが触っていて勝手に電話をかけていないか ・触らせないようにしてるけど時々写真いっぱい取られてる ・ボタンひとつで間違っと思ってもない人に電話をしていたり意図しないところにつながったりする

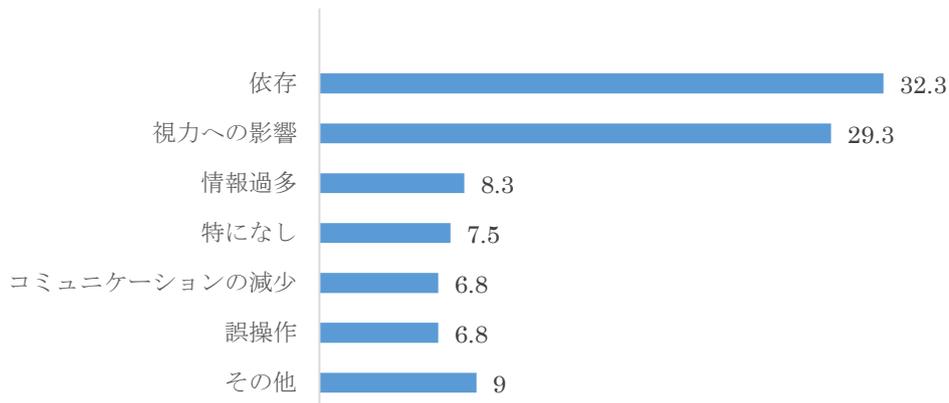


Figure 2 母親が思うスマートフォンを使用するデメリット・心配事

4. 考察

1) メディア使用の現状について

子どもとの関わりの中でよく使用する機器についての回答で、テレビに次いで2番目にスマートフォンを選択して回答した母親が多く、79.7%の母親がテレビやDVD・ブルーレイと同様に子どもと一緒に日常的にスマートフォンを使用している状況が明らかにされた。また、子育てについての情報収集手段としてよく用いるものとして、43.3%の母親がスマートフォンを選択して回答しており、意識調査においても「スマホで得られる子育て情報に満足している」の得点が高かったことから、子育てについての情報収集のためにスマートフォンを日常的によく使用していると考えられる。

また、子どもについての情報収集手段としてよく用いるものとして最もあげられたのは「ママ友の口コミ(59.3%)」であったが、先に示した久木元(2013)や武市(2014)の研究から、頻繁に会うママ友から直接情報を得るよりも、スマートフォンなどで連絡を取る中での情報交換が増えてきているのではないかと考えられる。情報収集手段として、親をよく用いるという回答が、ママ友の口コミ、スマートフォン、パソコンに次いで4番目であったことから、子育てに関する情報収集は対面接触によって得るのではなく、メディアを通して、自分が必要な情報だけを得るようになってきているのではないかと考えられる。

2) 母親のメディア使用の意識調査について

スマートフォン使用についての意識調査では「スマホは子どもに悪影響があると思う」という項目の得点が高く、「スマホは幼いころから使用しておくべきだ」、「もっと子育てにスマホを活用すべきだ」という項目の得点が低かったことから、母親は子どもが幼いころからスマートフォンを使用することをよく思っていないと考えられる。一方、「スマホで得られる子育て情報に満足している」の得点が高く、「子育てにスマホを使うことに罪悪感を感じる」の得点が高いのに対して「スマホを使うことに罪悪感を感じる」の得点が低いことから、子ど

も自身がスマートフォンを使用することや、子育てに使用することに抵抗があるが、母親自身がスマートフォンを使用することにはあまり抵抗がないと考えられる。

また、「子どもとの遊びの中でスマホをおもちゃと同じ感覚で使うことがある」、「スマホを持っていない親は大変だと思う」などの項目について、依存度が高い人ほど該当する傾向がみられたことから、日常的に使用している母親ほど子育ての中でもスマートフォンをよく使用していることが示唆された。

3) 母親が思うスマートフォンを使用する、メリット・デメリット

意識調査の結果からも述べたように、調査対象者の母親の多くは、子どもがスマートフォンを使用することに抵抗を感じているようであるが、スマートフォンを子育てに使用するメリットとして、多くの母親が手軽さをあげており、使いたくないと思いつつも手軽さから使用してしまっている現状がうかがえる。メリットとして、「手軽さ」以外にあげられた、「子どもが静かにしてくれる」や「外出時に役立つ」などの回答例からは、育児の中のお助けアイテムとしてよく使用されている状況がうかがえた。

デメリットについては、「依存」や「視力への影響」など、使い続けることで将来子どもに及ぼす影響を心配する回答が多く見られた。回答内容を見てみると、メリットの回答例では「PCをあけずに子どもの遊び場を調べられる」、「どうしても用事があるときに少し見て静かにしてくれるので助かります」、「おもちゃが手元になくてもアプリなどで遊ばせてあげられる」など、日常でそのように使用しているかがうかがえるような、具体的な回答が多い。それに比べて、デメリットの回答例を見てみると、「スマホを取り上げるとなくのでスマホ依存にならないか心配」、「目に影響するのか？悪くなる？」、「子供が使用することで親子の会話が減る気がする」などのように、実際に影響があるかは分からないため、子どもに使わせていてよいのかどうか分からずに、将来の影響について不安を感じているような回答例が多く見られた。また、「特になし」と回答した母親は、メリットでは 0.8%であるのに対して、デメリットでは 7.5%であった。

これらのことから、母親は子どもがスマートフォンを使用することはよくないことだと考えているが、具体的に何がよくないのかが分からずに、不安に感じながらも、手軽さや便利さから子育てにスマートフォンを使用しているという現状が明らかにされた。

Ⅲ 研究 2

1. 目的

研究 1 で示したように、メディアの普及に伴い母親の使用の現状について多くの研究がされている。それと同様に、親子のメディアの使用に関してもいくつか研究されている。佐藤・佐藤（2013）は紙絵本とデジタル絵本による読み聞かせの比較を行なっている。その結果、紙絵本では親主導で読み聞かせが行われるのに対し、タブレットでは子ども主導で操作が行われるという違いがみられた。メディア使用時に親子の相互作用を増やすためには、操作が子ども主導であっても、「子どもの言葉を受け止めながら一緒に楽しむことができるメディアである」という意識を親が持つことで相互作用を生み出すことができる。そのため、親の意識を変えていくことが重要な課題であると佐藤他（2013）は述べている。

また、タブレット端末の描画アプリと、紙を使用したときの描画活動の親子の発話数を比較した研究（佐藤・松本・田村・高岡，2016）では、アプリ使用時に母親からの発話が多く、紙での描画時では子どもからの発話が多い傾向が見られている。発話内容については、紙での描画時に子どもが自ら報告したり母親に相談しながら書く様子が見られ、アプリ使用時には母親が子どもに何をやっているか聞く様子が見られている。紙とアプリの両活動時に対話が盛んな対話親子は、親の対応により子どもが動機付けられ、気づきや学びが深いものになると考えられている。アプリ使用時のほうが対話が盛んな親子は、アプリの機能をきっかけに言葉がけを多くしており、アプリの機能により親子のインタラクションをデザインできる可能性が示唆されている。

上記のように、親子でメディアを使用する場合、親子の相互作用を促すことが、メディアを活用する一つの方法ではないかと考える。そこで研究 2 では、自由遊び場面、スマートフォン使用場面、タブレット使用場面、絵本読み聞かせ場面の 4 場面で、親子のやり取りの様子を観察し、各場面で母子のやり取りに差がみられるかどうかについて調査を行う。その中で、スマートフォンなどのメディアの使用が母子のやり取りにどの程度影響しているかについて調査を行うことを目的とする。

2. 方法

調査対象

2～3 歳の子どもを持つ母親を対象に、保育園と子育て支援センターで研究 1 を行う際に募集をかけ、行動観察の参加に同意した 22 組の親子を対象とした。参加した母親の平均年齢は 31.2 歳（23～37 歳、 $SD=4.0$ ）、子どもの平均年齢は 2 歳 6 ヶ月（1 歳 10 ヶ月～3 歳 8 ヶ月、 $SD=0.6$ ）であった。母親の有職率は 13.0% で、有職者全員が、1 週間の勤務時間として「10 時間から 20 時間」を選択していた。子どものきょうだい数は、22 人中 1 人っ子が 12 人、2 人きょうだいが 8 人、3 人きょうだいが 2 人であった。

調査内容

1) 質問紙調査

戸田・門田・久保・森本（2004）により作成された携帯電話依存傾向を測る尺度（a cellular phone dependence questionnaire：CPDQ）を行った。CPDQは女子大生を対象に行われる携帯電話依存傾向を調査するための尺度であるが、「工作中や授業中でもメールをする」という項目以外は学生に特化した項目ではないと判断し、母親を対象に使用した。項目内の「ケータイ」については、本研究では「スマホ」に変えて調査を行った。CPDQは20項目で構成されており、「該当する」、「やや該当する」、「あまり該当しない」、「まったく該当しない」に対し3～0点の得点が与えられている。戸田他（2004）は、総得点が42点以上を「携帯電話依存傾向の強い群」、42点未満を「携帯電話依存傾向正常群」と分類している。

また、研究1で使用したWakayama Smartphone Dependence Scale (WSDS) も行った。WSDSの結果については、研究1に示している。それに加えて、フェイスシートで、母親の年齢、行動観察に参加した子どもの年齢、母親の職業の有無、仕事をしていると回答した人には勤務時間も選択肢の中から回答を求めた。

2) インタビュー調査

インタビュー調査では、①行動観察に参加した子どものきょうだいの有無、②母親の1日のスマートフォン使用時間、③母親の使用目的、④子どもの使用頻度、⑤子どもの使用内容、⑥子どもがスマートフォンなどを使用することについてどのように感じているか、⑦スマートフォンを使用するメリット、デメリットなどについて調査を行った。

3) 行動観察

行動観察の内容はTable 10に記した4場面を設定した。親子タブレット使用場面で使用したアプリは、研究1のおすすめのアプリであげられた中から選んだ。対象年齢が当てはまり、アプリ内でいくつかのゲームを選択できるため幅広い子どもが使用でき、親子で楽しめるゲーム性のあるアプリに最も当てはまった、『もっと！あそびぷらす 2歳から楽しめる感覚遊びアプリ』（WAO CORPORATION., 2012）を使用した。

Table 10 行動観察の場面設定

場面	時間	設定
自由遊び場面	10分	室内のおもちゃで普段通り自由に遊ぶ。
母親スマートフォン使用場面	3分	母親は、『注文の多い料理店』（宮沢，1990）の文章をスマートフォンを使用してメールに打ち込み、3分後に打てたところまでを送信する。 その間子どもはおもちゃで自由に遊び、母親には、子どもから関わりがあった場合はいつも通り対応するよう教示をする。
お片付け		時間は設定せずに「お片付けをしてください。終わったらタブレットを渡すので、教えてください」とだけ教示する。
親子タブレット使用場面	3分	親子でタブレットを使用し、あらかじめタブレット内にインストールしてあるゲームアプリ『もっと！あそべビぷらす 2歳から楽しめる感覚遊びアプリ』をしてもらう。
絵本読み聞かせ場面	3分	観察者が親子タブレット使用場面終了後に、タブレットと、『いやだいやだ』（せなけいこ，1969）、『まよなかのコックさん』（ボツカ，2006）、『おおきなかぶ』（トルストイ再話・内田訳・佐藤画，1966）の絵本3冊を引き換える。親子でその中から好きな絵本を選び読む。

行動観察場面の構造

行動観察は子どもが走り回らないように、部屋を 2m50cm×1m80cm の広さになるよう衝立で仕切って行った。部屋の中央に 1m45cm×90cm のラグを敷き、ラグ横の衝立側に、ぽぽちゃん人形セット、おままごとセット、KAPRA、ミニピアノを置いた。ぽぽちゃん人形セットとおままごとセットとミニピアノは同じ箱に入れて設置した。録画のため、ハンディカメラ 3 台を設置した（Figure 3）。

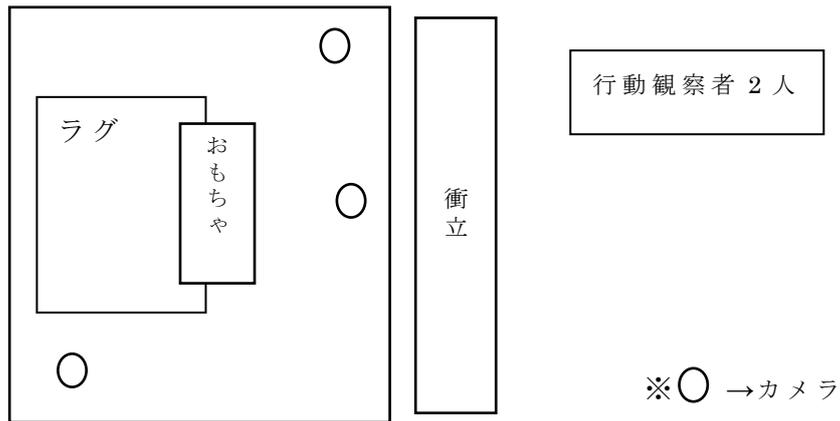


Figure 3 行動観察場面の構造

行動観察の分析内容

記録用のカメラ 3 台の録画映像を見て、場面ごとに各指標 3 分間の総回数を記録した (Table 11)。各指標の内容に基づき、2 人の評定者が独立に録画映像を見ながら評定を行った (一致率 93.6%)。

Table 11 行動指標の分類

分類	指標	内容
母親の行動指標	子どもへの声かけ	母親が子どもに対して声をかけた回数。独り言や鼻歌などは含まない。
	子どもの関わりかけに対する応答	声かけやボディータッチなど、子どもからの関わりや発話に対して応答した回数。頷きや笑いかけも含む。
子どもの行動指標	発話数	子どもの発話すべて。独り言も含む。
	母親の関わりかけに対する応答	母親の声かけや促しに対して応答した回数。頷きや笑いかけも含む。
親子の行動指標	同一のものを見る回数	親子で同一のものを見る回数について 10 秒ごとのタイムサンプリングを行った (計 18)。
	位置の印象	母親の手が届き、すぐに抱っこできる位置を手の届く範囲とし、①手の届く範囲の前、②手の届く範囲後ろ、③手の届く範囲横、④手の届かない範囲の 4 つの中から当てはまるものを記録した。

手続き

最初に観察室とは別室で、行動観察の流れと研究の目的がスマートフォンを子育ての中で活用する方法であることを伝えた。また、行動観察中は、子どもに対して普段通りの関わりをしてもらうよう教示を行った。すべてを説明し終えた後に同意書に記入をしてもらい、観察室に移動した。

行動観察中は、衝立越しに行動観察者 2 名が待機し、1 名が行動観察場面の切り替え時に、その都度親子のほうに行き、次の場面の説明を行った。観察終了後に別室に戻り、行動観察者 1 人が子どもと遊んでいる間に、インタビューと質問紙調査を行った。

倫理的配慮について

本研究は、関西福祉科学大学の研究倫理委員会の審査を受けている(15-42)。調査の目的、結果は統計的に処理され個人が特定されないこと、録画データは数値化されしだい消去し、個別の映像等が公開されることのないことなどを説明したうえで同意書に記入してもらった。また、行動観察前に、いつでも中断できることを伝えて行動観察を行った。

3. 結果

1) 質問紙調査の結果

CPDQの因子ごとの項目と、各因子の平均値と標準偏差をTable 12にまとめた。

Table 12 a cellular phone dependence questionnaire (CPDQ) の結果

	項目内容	<i>M</i>	<i>SD</i>
第1因子	<ul style="list-style-type: none">・電車などに乗ると、とりあえずスマホをさわる・電話やメールの着信がないか無意識にスマホを開くことがある・メールを1日10件以上する・メールが入るとうれしい・用事もないのに内容のないメールを送ることがある・メールを打つときに絵文字をよく使う・メールには必ず返信する・長いメールをよくうつ	11.32	3.76
第2因子	<ul style="list-style-type: none">・スマホを忘れるとその日一日落ち着かない・毎日スマホを充電する・電波の悪いところにはあまり行きたくない	4.36	2.44
第3因子	<ul style="list-style-type: none">・夜遅くてもスマホで電話をしてしまう・1日1時間以上スマホで話す	.23	.53
第4因子	<ul style="list-style-type: none">・電車の中でも電話をする、または応対をする・人と二人でいるときにスマホを使う	2.05	1.75
第5因子	<ul style="list-style-type: none">・スマホを持ってない人とは付き合いにくい・電話や直接話すよりメールのほうが本音を言える	1.18	1.05
第6因子	<ul style="list-style-type: none">・スマホ代のほうが服や食事代より優先される・スマホを落とすほうが財布を落とすよりも嫌である	1.45	.96
総得点		20.59	7.89

回答者全員の CPDQ の総得点の結果を Figure 4 に示した。最も低い得点は 5 点であり、最も高い得点は 31 点であった。戸田他 (2004) の「携帯電話依存傾向の強い群」に相当する総得点 42 点以上となる人はおらず、回答者全員が「携帯電話依存傾向正常群」に分類される結果となった。

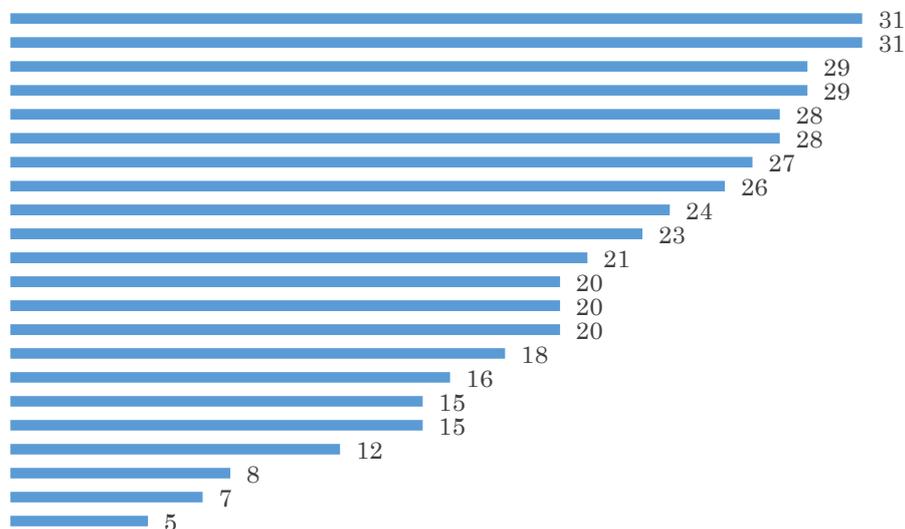


Figure 4 a cellular phone dependence questionnaire (CPDQ) 総得点の分布

2) 母親と子どものスマートフォン使用の現状 (インタビューの結果より)

インタビューで得られた、母親の 1 日のスマートフォンの使用時間の実数を Figure 5 に示す。1 日の使用時間として最もあげられたのは 1 時間であった

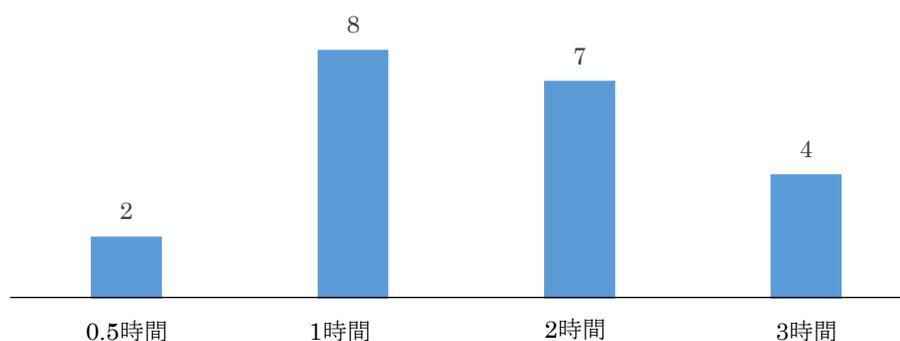


Figure 5 母親のスマートフォンの使用時間の実数

母親がスマートフォンをよく使用する時間帯について、インタビューの内容を「子どもが寝ているとき」、「手が空いたとき」、「決まっていない」、「ご飯を作るとき」、「連絡が来たとき」に分類して Figure 6 に実数をまとめた。その結果、「子どもが寝ているとき」という回答が最も多かった。

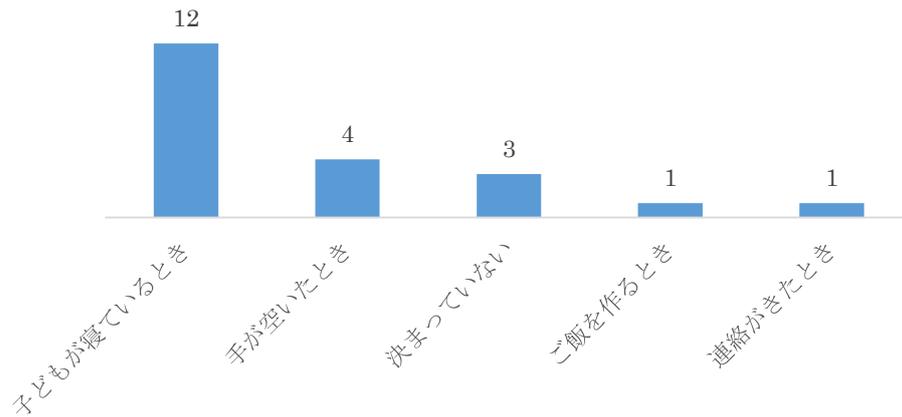


Figure 6 母親がスマートフォンをよく使用する時間帯の実数

母親のスマートフォン使用内容を、インタビューの内容から、「情報収集」、「連絡を取る」、「ゲームをする」、「子どもが使うのを見ている」、「ネットショッピング」に分類し、Figure 7 に実数をまとめた（複数回答）。最も多かったのは情報収集であった。

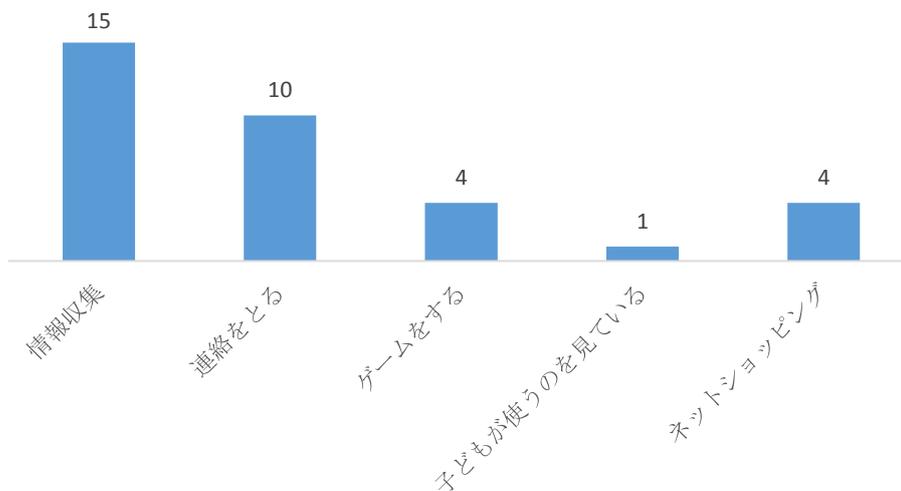


Figure 7 母親のスマートフォン使用内容の実数

子どものスマートフォンの使用頻度について、インタビューの内容を「ほとんど使用しない」、「(外出時など)たまに使用する」、「毎日・習慣的に使用する」に分類して、Figure 8 に実数をまとめた。最も多かったのは、「毎日・習慣的に使用する」であった。

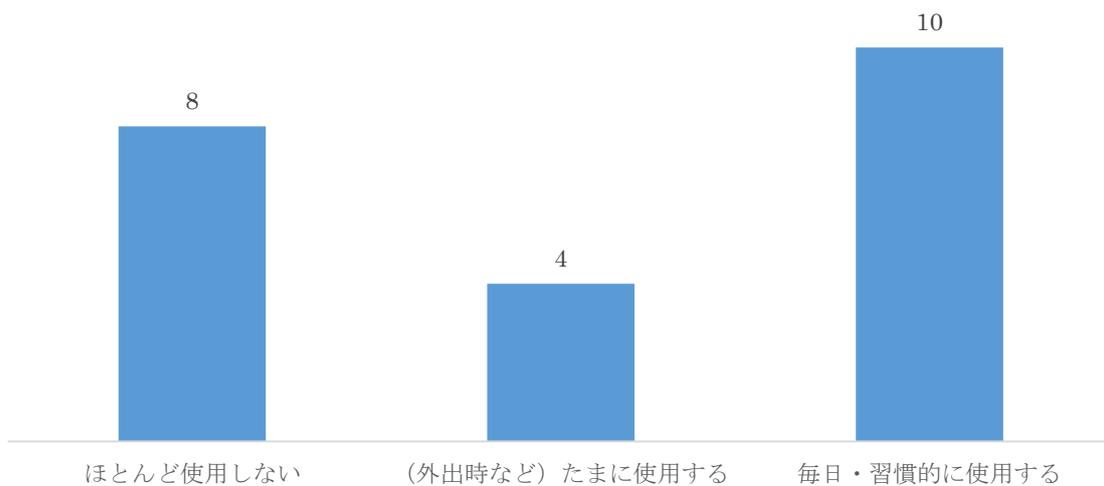


Figure 8 子どものスマートフォン使用頻度の実数

子どものスマートフォンの使用内容について、インタビューの内容から、「ゲームアプリをする」、「動画アプリで動画を見る」、「自分の写真を見る」に分類して、Figure 9 に実数をまとめた。その結果、最も多かったのは動画アプリで動画を見るであった。

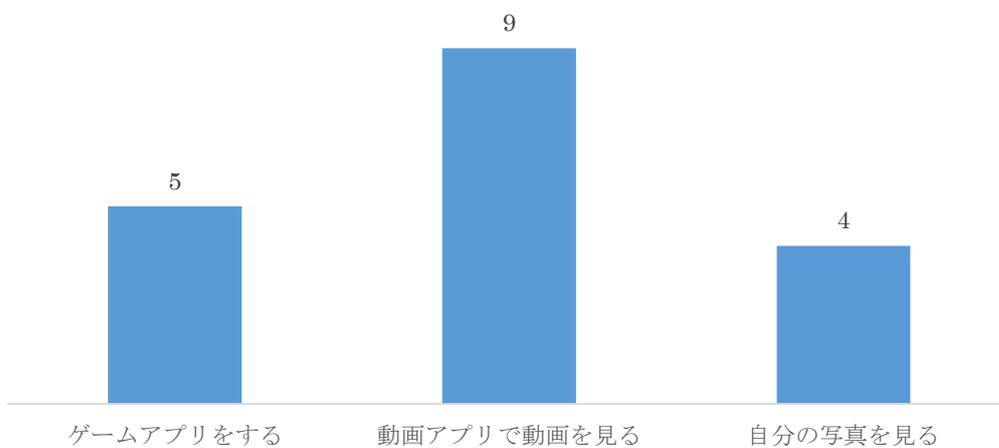


Figure 9 子どもの使用内容の実数

子どもがスマートフォンをよく使用する場面について、インタビューの内容を、「外出時によく使用する」、「家でよく使用する」、「写真を撮ったときに見る」、「母親が手を離したいとき」に分類し、Figure 10 に実数をまとめた。その結果、外出時によく使用すると回答した母親が最も多かった。

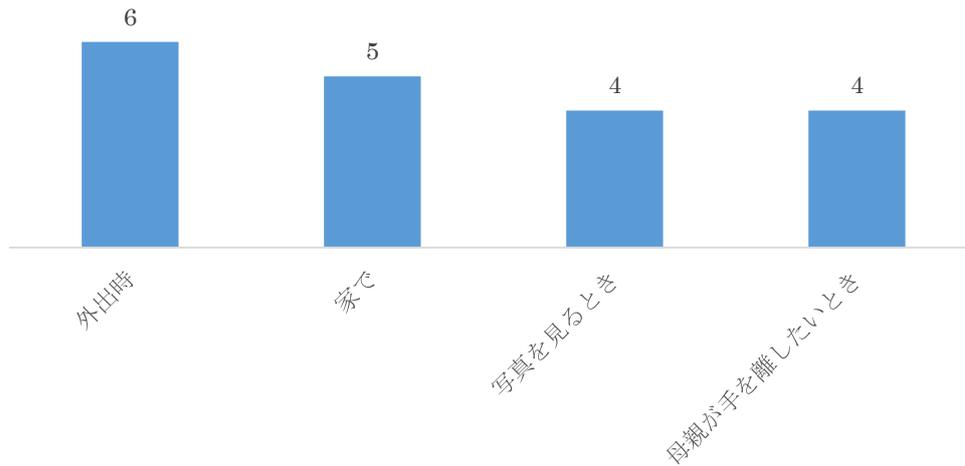


Figure 10 子どもがスマートフォンをよく使用する場面の実数

行動観察に参加した子どもがスマートフォンなどのメディアを使用することについて、母親がどう感じているかをインタビューでたずねた結果、よく思わないと回答した母親が 15 人、悪いと思わないと回答した母親が 7 人であった。

3) 行動観察の結果

各場面と行動指標、同一のものを見た回数について一元配置の分散分析を行った (Table 13)。子どもへの声かけでは、「自由遊び場面 (37.9)」ならびに「タブレット使用場面 (42.0)」が、「スマートフォン使用場面 (10.9)」と「絵本読み聞かせ場面 (16.7)」よりも有意に多かった。子どもへの応答では、「自由遊び場面 (10.9)」ならびに「スマートフォン使用場面 (9.9)」が、「タブレット使用場面 (3.9)」と「絵本読み聞かせ場面 (3.9)」よりも有意に多かった。

子どもの発話数では、「自由遊び場面 (17.0)」ならびに「スマートフォン使用場面 (18.7)」が、「タブレット使用場面 (8.4)」と「絵本読み聞かせ場面 (7.1)」よりも有意に高かった。母親への応答では、「自由遊び場面 (7.4)」が「スマートフォン使用場面 (2.4)」と「絵本読み聞かせ場面 (4.2)」よりも有意に多かった。

同一のものを見た回数については、「自由遊び場面 (17.7)」、「タブレット使用場面 (17.7)」、「絵本読み聞かせ場面 (17.4)」が僅差で並び、「スマートフォン使用場面 (7.1)」のみ有意に少ないという結果であった。

Table 13 各場面の指標の一元配置の分散分析と多重比較の結果

	<i>M (SD)</i>				<i>F</i> 値		
	自由遊 び場面 (A)	スマートフ ォン使用場 面 (B)	タブレッ ト使用場 面 (C)	絵本読み聞 かせ場面 (D)	合計		
子どもへの 声かけ	37.9 (15.3)	10.9(8.1)	42.0(16.8)	16.7(9.6)	26.9 (18.5)	30.7*	A>B,D C>B,D
子どもへの 応答	10.9 (7.9)	9.9(7.9)	3.9(5.2)	3.9(3.9)	7.1 (7.1)	7.5*	A>C,D B>C,D
子どもの 発話数	17.0 (12.1)	18.7(14.2)	8.4(8.2)	7.1(7.0)	12.8 (11.8)	6.6*	A>C,D B>C,D
母親への 応答	7.4 (4.4)	2.4(2.4)	5.2(4.2)	4.2(4.4)	4.8 (4.3)	6.07*	A>B,D
同一のもの を見た回数	17.7 (.6)	7.1(4.2)	17.7(.6)	17.4(2.2)	15.0 (5.2)	105.2 *	A,C,D>B

* $p < .05$

各場面の親子の位置について χ^2 検定を行った。その結果、自由遊び場面(50.5%)、タブレット使用場面(59.1%)、絵本読み聞かせ場面(68.2%)では、「手の届く範囲の前」が最も多かったのに対し、スマートフォン使用場面では72.7%が親から「手の届かない範囲」に位置していた($\chi^2(6)=36.7, p<.05$)。

4) a cellular phone dependence questionnaire (CPDQ) と各項目との相関

インタビューから得られた、母親のスマートフォン使用時間とCPDQについて、相関を求めた。その結果、弱い正の相関がみられた($\rho = .44$)。

CPDQと母親の行動指標について相関を求めた(Table 14)。その結果、CPDQと自由遊び場面における「子どもへの声かけ」に比較的強い正の相関がみられた($\rho = .60$)。

Table 14 a cellular phone dependence questionnaire (CPDQ) と

母親の行動指標 相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. CPDQ	—								
2. 自由遊び場面 子どもへの声かけ	.60**	—							
3. 自由遊び場面 子どもへの応答	0.08	0.29	—						
4. スマホ使用場面 子どもへの声かけ	0.19	0.33	.49*	—					
5. スマホ使用場面 子どもへの応答	0.13	0.12	.72**	.71**	—				
6. タブレット使用場面 子どもへの声かけ	0.07	.54*	.61**	.52*	0.29	—			
7. タブレット使用場面 子どもへの応答	-0.03	-0.15	0.41	0.23	.65**	-0.13	—		
8. 絵本読み聞かせ場面 子どもへの声かけ	-0.31	-0.05	0.35	0.15	0.14	.61**	-0.09	—	
9. 絵本読み聞かせ場面 子どもへの応答	-0.27	0.04	.61**	0.30	.44*	0.35	.50*	0.40	—

** $p < .01$, * $p < .05$

CPDQ と子どもの行動指標について相関を求めた (Table 15)。その結果、母親の依存度と子どもの行動指標との間には相関がみられなかった。

Table 15 a cellular phone dependence questionnaire (CPDQ) と

子どもの行動指標 相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. CPDQ	—								
2. 自由遊び場面 発話数	-0.02	—							
3. 自由遊び場面 母親への応答	0.34	.53*	—						
4. スマートフォン使用 場面 発話数	0.02	.87**	.60**	—					
5. スマートフォン使用 場面 母親への応答	0.11	.50*	0.30	.51*	—				
6. タブレット使用場面 発話数	0.09	0.36	0.11	0.42	0.09	—			
7. タブレット使用場面 母親への応答	-0.07	0.22	0.39	0.11	-0.22	0.12	—		
8. 絵本読み聞かせ場面 発話数	-0.21	0.31	-0.05	0.26	-0.11	0.32	0.13	—	
9. 絵本読み聞かせ場面 母親への応答	-0.19	.54**	.48*	0.42	0.16	0.16	.54*	0.08	—

** $p < .01$, * $p < .05$

また、行動観察場面ごとの、母親と子どもの行動指標について相関を求めた (Table 16)。その結果、母親の「スマートフォン使用場面の子どもへの声かけ」と、子どもの「自由遊び場面の発話数 ($\rho = .46$)」、「スマートフォン使用場面の母親への応答 ($\rho = .68$)」の間に比較的強い正の相関がみられた。スマートフォン使用場面で母親から子どもへの声かけが多い場合、子どもの自由遊び場面の発話とスマートフォン使用場面の母親への応答が多いことが示された。

母親の「スマートフォン使用場面の子どもへの応答」と、子どもの「自由遊び場面の発話数 ($\rho = .66$)」、「自由遊び場面の母親への応答 ($\rho = .46$)」の間に比較的強い正の相関が、「スマートフォン使用場面の発話数 ($\rho = .76$)」、「スマートフォン使用場面の母親への応答 ($\rho = .74$)」の間に強い正の相関がみられた。このことから、スマートフォン使用場面で母親の子どもに対する応答が多い場合、自由遊び場面の子どもの応答と発話、スマートフォン使用場面の子どもの応答と発話が多いという結果が示された。

母親の「タブレット使用場面の子どもへの声かけ」と、子どもの「自由遊び

場面の発話数 ($\rho = .47$)」、「自由遊び場面の母親への応答 ($\rho = .48$)」の間に比較的強い正の相関がみられた。母親の「タブレット使用場面の子どもへの応答」と、子どもの「スマートフォン使用場面の発話数 ($\rho = .43$)」、「タブレット使用場面の発話数 ($\rho = .57$)」の間に比較的強い正の相関がみられた。このことから、タブレット使用場面で母親から子どもへの声かけが多い場合、自由遊び場面の子どもの発話と応答が多く、タブレット使用場面で母親から子どもへの応答が多い場合、スマートフォン使用場面とタブレット使用場面の子どもの発話が多いという結果が示された。

母親の「絵本読み聞かせ場面の子どもへの声かけ」と、「自由遊び場面の発話数 ($\rho = .47$)」、「絵本読み聞かせ場面の発話数 ($\rho = .45$)」の間に比較的強い正の相関がみられた。「絵本読み聞かせ場面の子どもへの応答」と、子どもの「自由遊び場面の発話数 ($\rho = .54$)」、「スマートフォン使用場面の発話数 ($\rho = .45$)」、「絵本読み聞かせ場面の発話数 ($\rho = .66$)」の間に比較的強い正の相関がみられた。このことから、絵本読み聞かせ場面において母親から子どもへの声かけが多い場合、子どもの自由遊び場面と絵本読み聞かせ場面の発話が多いという結果が示された。また、絵本読み聞かせ場面で母親の子どもへの応答が多い場合、子どもの自由遊び場面とスマートフォン使用場面、絵本読み聞かせ場面の発話が多くなるという結果が示された。

Table 16 母親の行動指標と子どもの行動指標 相関

	自由遊び場面		スマホ場面		タブレット場面		絵本場面	
	発話数	母親への 応答	発話数	母親への 応答	発話数	母親への 応答	発話数	母親への 応答
自由遊び場面 子どもへの声かけ	-0.05	0.36	0.01	-0.19	-0.19	0.19	0.17	-0.14
自由遊び場面 子どもへの応答	.84	.57	.82	0.37	0.32	0.36	0.37	.52
スマホ使用場面 子どもへの声かけ	.46*	0.36	0.42	.68**	-0.21	-0.29	-0.07	0.05
スマホ使用場面 子どもへの応答	.66**	.46*	.76**	.74**	0.33	-0.07	0.19	0.17
タブレット使用場面 子どもへの声かけ	.47*	.48*	0.34	0.07	-0.10	0.29	0.34	0.31
タブレット使用場面 子どもへの応答	0.29	0.19	.43*	0.37	.57**	-0.08	0.14	0.13
絵本読み聞かせ場面 子どもへの声かけ	.47*	0.35	0.33	-0.02	-0.07	0.24	.45*	0.41
絵本読み聞かせ場面 子どもへの応答	.54**	0.09	.45*	0.18	0.24	0.12	.66**	0.36

** $p < .01$, * $p < .05$

4. 考察

1) 母親と子どものスマートフォン使用の現状について

子どものメディア使用については、研究1と同様に、よく思っていない母親が多かった。母親のスマートフォン使用内容についても、研究1と同様に情報収集が最も多い結果となった。スマートフォンをよく使用する時間帯として最もあげられたのは、子どもが寝ているときであった。その理由として、インタビューで、子どもの前でスマートフォンを使用すると、子どもが使用したがるためなるべく使用しないようにしていると述べた母親が多く、子どもにあまり使用しないようにしている様子が見られた。

子どもの使用頻度については、毎日使用する子どもが多かった。また、使用する場面については、外出時が多く、使用内容はゲームが多かった。このことから、研究1でもあげられたように、手軽であることから、外出時に子どもが退屈しないようにおもちゃ代わりに使用している母親が多いことが示唆された。

2) 行動観察の結果について

行動観察では、自由遊び場面において、母親の子どもへの声かけ、子どもへの応答、子どもの発話数、母親への応答が他場面と比較して、有意に多いとい

う結果が示された。また、同一のものを見る回数についても多かったため、自由遊び場面がもっとも親子のやり取りが多かったと考えられる。

スマートフォン使用場面では、母親の子どもに対する声かけが減り、応答中心となっていることが示された。子どもの発話が多いが、これは母親からの関わりが減ったため、子どもが母親の注目を自分に向けようとした結果であると推察される。また、スマートフォン使用場面のみ有意に親子の位置が遠いという結果が示された。同一のものを見た回数についても、他場面と比較して有意に少なかった。これらのことから、母親のスマートフォン使用時が最も親子のやり取りが希薄であったと考えられる。

タブレット使用場面では、母親からの声かけは多いが、子どもの発話は少ないという結果となった。佐藤他（2016）の研究で、アプリ使用時の母親の発話内容として、子どもに何をしているか聞く様子が見られているが、本研究においても、タブレット使用時に操作が子ども主体となってしまったため、母親は子どもがタブレットに集中しすぎないために積極的に声をかけていたのではないかと考えられる。これらのことから、タブレット使用時に親子のやり取りが増えたわけではなく、スマートフォン使用場面と主体となって操作をする人が変わっただけで、逆のことが起きていたのではないかと考える。しかし、同一のものを見る回数については、スマートフォン使用場面より有意に多く、佐藤他（2013）が述べているように、「子どもの言葉を受け止めながら一緒に楽しむことができるメディアである」というように親の意識を変えることで、親子の相互作用を増やすことができるのではないかと考えられる。

母親の依存度と行動指標については、依存度が高い母親ほど自由遊び場面において子どもへの声かけが有意に多いという結果が示された。しかし、依存の高さとメディア使用時の子どもへの関わりについては、有意な差は見られないという結果となった。また、母親の依存度の高さと、子どもの発話数、母親への応答の間に有意な差は見られなかった。

母親の行動指標の相関についてしてみると、絵本読み聞かせ場面の子どもの応答は平均回数が少ないにもかかわらず、絵本読み聞かせ場面において子どもへの応答が多い母親は他場面においても応答が多いという結果が示された。子どもへの応答は、子どもの言動に対して母親が応答した回数をカウントしているため、子ども主体の親子の関わりが生じていると考えられる。そのため、絵本読み聞かせ場面で応答が多い母親は、子ども主体の関わりができていていると考えられる。

母親と子どもの行動指標の相関について場面ごとにしてみると、自由遊び場面では有意な相関は見られなかった。スマートフォン使用場面では、親子ともに応答中心となっており、親子の声かけ、発話数、応答の平均回数の少なさから、最低限の関わりのみが行われていると考えられる。

タブレット使用場面では、母親の応答と子どもの発話数にのみ相関が出ていることから、子ども主体の関わりとなっていると考えられる。

絵本読み聞かせ場面では、母親の声かけと応答と、子どもの発話数に相関がみられるため、母親主体で、母親の促しによって親子の関わりが行われていると考えられる。

IV 総合考察

研究 1 と研究 2 を通して、母親のスマートフォン使用についての意識調査や現状について、また、メディアが親子の相互作用に与える影響について考察した。行動分析の結果、スマートフォンを母親が使用すると、有意に親子の相互作用が減るという結果が示された。研究 1 でも述べたように、将来さらにメディアが普及していき、母親の使用率も上がっていくと考えられる。それに伴い、親子の相互作用が減ってしまうのではないかと危惧された。

特定の対象との情緒的結びつきを Bowlby (1969) は「愛着 (アタッチメント)」と名付け、子どもが不安や恐怖を感じた時、アタッチメント対象者に接近し、安定や快適を感じるとしている。そして、不安や恐怖が無くなるまでその行動は継続する。このように、アタッチメントの対象者との相互作用を通して、自分の周りの環境やアタッチメント対象、自己に関する心的な表象モデルを構築する。このモデルを内的作業モデルと言ひ、この作業モデルは無意識かつ自動的に働くため、無意識に修正するのは難しいとされている(数井・遠藤, 2005)。近藤・井上・中野・草薙 (2006) はこのアタッチメントの安定性と感性との関連について研究を行っている。この研究の結果、アタッチメントの安定性と母親の感性との間に高い相関がみられ、母親の感性が高ければ、母子が別々のものに興味を示していることが少ないということが明らかにされている。また、感性で重要なのは、乳児の内面世界に関心を寄せたり、それを客観的に叙述したりすることではなく、乳児になりこみ、乳児と一緒に行動することだと述べられている。これらのことから、子どもが幼い時から母親がスマートフォンを使用しすぎると、親子の相互作用が減り、内的作業モデルの構築に影響するのではないかと考える。また、母親が子ども以外に目を向ける時間が増えることで、安定したアタッチメントの構築にも影響するのではないかと考える。近藤他 (2006) は、感性で重要なのは、乳児の内面世界に入り込み、一緒に行動することであると述べているが、スマートフォン使用によって、母親の感性は下がってしまうのではないかと考えられる。

また、子どもが幼いころからメディアに触れることについて、藤川 (2008) は以下のように述べている。子どもは乳児期に親に抱かれ、多くの言葉をかけられることによって、周囲への基本的信頼感を築いていくが、親からあまり関わられずに育つと、安心感を得られずに育ち、表面的には手がかからない子どもに見えても自分を肯定できず、周囲を信頼できず、成長してしまうと考えられる。メディアに子守をさせてしまうと、親子の関わりが希薄になり、子どもは話もせず信頼もしないという状況になりかねない。そのため、メディアの有無に関わらず、親子がしっかりとコミュニケーションをとることが重要であ

るとも述べている。藤川（2008）のようにメディアの影響と、その中での親子のコミュニケーションの重要性を述べている研究者は多くみられる。

石戸（2014）は、現代の子どもたちは、生まれながらにネットやデジタルを駆使する「デジタルキッズ」であり、彼らが担っていく時代は、新しいルールや権利や義務が求められるかもしれないが、デジタルキッズ世代が活躍できるよう、親は環境を整えておく必要があると述べている。また、親がファシリテーターとなって、子どもの自主性や想像力を引き出していくことが大事であり、その際何よりも大切なのはファシリテーターとなる親自身が楽しみ、多様な考えに触れ、学び続けようとする姿勢を示すことで、子どもも真剣に話を聞き、答えてくれると述べている。

本研究では、メディアが直接子どもに及ぼす影響ではなく、メディアを使用することによって、親子の相互作用にどのような影響があるかについて検討することを目的に検証した。メディアが普及していく中で、子どもの発達に悪い影響を与えると主張する研究者が増えており、身体的発育やコミュニケーション行動を中心とした、発育初期の様子との関連性について、様々な要因を含めて検討を行うような研究もあるが（菅原, 2005）、実際にメディアが発達に影響するのかどうかという研究はあまり行われていないのが現状である。一方、上記のように親子、特に乳児期の親子にメディアが与える影響についての研究は増えてきている。本研究においても、母親がスマートフォンを使用することで、子どもとの関わりが有意に減ることが示された。タブレット使用時においても、相互作用が減っていたが、親子で同一の物を見る回数が多かったことや、母親からの声かけが多かったことから、メディアを親子の相互作用を増やすツールとして使用できる可能性が示唆された。これらのことから、メディアはどちらか一人で使用するのではなく、親子で一緒に使用する重要性が示された。

メディアの普及に伴い、使用目的や内容が多様化していくにあたって、メディアはより日常に密接したものとなっていくと予想される。それらの影響について、常に考慮していく必要があると考える。それと同時に、先行研究でも示されているように、メディアの使用を否定するのではなく、子どもたちの健やかな育ちのためにどのように使用していくか、子どもたちが安心して使用できる環境を親が用意していく必要があると考える。また、メディアを活用する方法を検討していくことで、母親がメディアをうまく活用し、子どもと安定したアタッチメントを構築できる環境を提供していけるのではないかと考える。

今後は、親子の発話の内容などをより詳細に分析していくことで、より具体的に親子の関わりの中でメディアを活用する方法について検討していく必要がある。

V 引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2013). 乳幼児の親子のメディア活用調査
< <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4105> > (2015年7月22日)
- ボッカ (2006). まよなかのcockさん スカイフィッシュ・グラフィックス.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol.1 Attachment*. (J.ボウルビィ: 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社.)
- 藤川大祐 (2008). ケータイ世界の子どもたち 講談社現代新書.
- 石戸奈々子 (2014). 子どもの創造カスイッチ! 一遊びと学びの秘密基地 CANVAS の実践— フィルムアート社.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (編者) (2005). アタッチメント 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- 近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子 (2006). アタッチメントに関わる母親の感性概念の検討 心理学部研究紀要, 2, 13-24.
- 久木元美琴 (2013). 東京圏における子育て期の母親のインターネット利用とオンライン・コミュニティの役割 地理科学, 68 (3), 177-189.
- 草薙淳子・高野政子・藤田裕子 (2015). 小児救急外来を受信した保護者のインターネット利用実態と受診判断 看護科学研究, 13, 35-42.
- 松村真木子 (2015). 子どもをめぐるインターネット環境変化: 新聞記事 (2007年~2015年) の分析 埼玉学園紀要 (人間学部編), 15, 165-178.
- 中山和美・山崎由美子・石原昌・久保田隆子・寺田眞廣・秋月百合・平川真由美 (2008). 母親たちが望む育児支援情報提供のあり方 母性衛生, 48(4), 471-478.
- 宮沢賢治 (1990). 注文の多い料理店 新潮文庫.
- 佐藤朝美・松本留奈・田村徳子・高岡純子 (2016). 幼児期におけるタブレット端末使用に対する親の働きかけの特徴—描画アプリを使用したプロトコル分析による検討— 愛知淑徳大学論集 (人間情報学部篇), 6, 17-27.
- 佐藤朝美・佐藤桃子 (2013). 紙絵本との比較によるデジタル絵本の読み聞かせの特徴の分析 日本教育工学会論文誌, 37, 49-52.
- せなけいこ (1969). いやだいやだ 福音館書店.
- 総務省 (2014). 平成 26 年度版 情報通信白書
< <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/> > (2015年7月3日)
- 菅原ますみ (2005). 乳児期の心身の発達とメディア接触 NHK 放送文化研究所 “子どもに良い放送” プロジェクトフォローアップ調査中間報告第 2 回調査報告書, 34-49.
- 武市久美 (2014). 子育てにおける SNS 利用について—「ママ友」コミュニケーションに着目して— 東海学園大学紀要, 19, 79-89.

戸田雅裕・門田和之・久保和毅・森本兼曩（2004）. 女子大生を対象とした携帯電話依存傾向に関する調査 日衛誌, 59, 383-386.

戸田雅裕・西尾信宏・竹下達也（2015）. 新しいスマートフォン依存尺度の開発 日衛誌, 70, 259-263.

A・トルストイ（作）佐藤忠良（絵）内田莉莎子（訳）（1966）. おおきなかぶ 福音館書店.

山田隆（2005）. 子育てにおけるインターネット利用—携帯電話による子育てホームページ— 東海女子大学紀要, 25, 151-162.

行動観察場面で使用したアプリ

WAO CORPORATION（2012）. もっと！あそべビぷらす 2歳から楽しめる感覚遊びアプリ <<http://waochi.wao.ne.jp/asobaby>>

謝辞

本研究を進めるにあたり、丁寧にご指導を頂いた指導教官の谷向みつえ教授に感謝いたします。関西福祉科学大学心理科学部の亀島信也教授にも多くの貴重なご助言を賜り、感謝いたします。

また、本研究に関わってくださった柏原市の子育て支援センターの先生方、関西福祉科学大学附属幼稚園の先生方、柏原市内の保育園の先生方にも、大変貴重なご助言を受け賜わり、あたたかく研究に協力して頂いて、大変感謝いたしております。

最後になりましたが、アンケート調査や行動観察に快く参加してくださった皆様には深謝いたします。本当にありがとうございました。